

『春雨物語』 「死首の咲顔」の構造と主題

新保沙絵

一、先行研究・問題提起

『春雨物語』は、文化五年（一八〇八）に成立した、上田秋成著の読本である。歴史的題材に取材した作品、伝承に着想を得た作品など、素材を様々に扱った物語集である。作者最晩年の寛政年中から文化五年にかけて、書き集められたものが文化五年にまとめられ、作者没年の翌六年までに改稿が行われていた。出版されておらず、数種の自筆本が伝わる。「死首の咲顔」は『春雨物語』に収録された短編の一つであり、文化五年本と羽倉本のみで完全原稿が残る。その他には、天理卷子本に結末部と考えられる断簡のみが伝わっている。

以下に「死首の咲顔」の梗概を示す。津の国兔原の郡宇奈五の丘には、昔から酒造を生業とする者が多くいた。中でも特に裕福であった五曾次の家には五蔵という一人息子がいた。無慈悲な父とは違い、気立てのよい五蔵は人々から慕われていた。一方で、五曾次と同じ一族にあたる元助は時流を失って貧しい暮らしをしており、母と妹の宗を何とか養っていた。次第に五蔵と宗が恋仲となるが、五曾次に猛反対される。五蔵の訪れが絶え、二人の恋愛が難しい状

況の中で宗は次第に体調を崩し、病に伏せてしまう。いよいよ宗の死期を悟った五蔵と元助らは嫁入りの約束を取り交わす。その翌朝、五曾次の家に興入れをした元助一行であったが、五曾次によって拒絶され、元助はその場で宗の首を切り落とす。この騒動は村を脅かした事件として裁判沙汰となり、一行にそれぞれ処分が下される。その後事件に関わった者たちは散り散りとなり、五蔵は発心し法師となった。

「死首の咲顔」には題材となった「源太騒動」と呼ばれる事件がある。明和四年、山城国愛宕郡一乗寺村で発生したもので、その内容は百姓源太が同村の庄屋渡辺右内方に乗り込み、右内不在の中その父親団次の目前で妹や糸を斬り捨てたこととされている。秋成による先行作品「ますらを物語」は、文化三年四月十七日に秋成が円光寺（山城国愛宕郡一乗寺村）に詣で渡辺源太に会い、事件当時を想起し執筆したという。これには本来題名が無かったが、藤井乙男博士が内容より命名したのである。

『春雨物語』「死首の咲顔」は源太騒動、『西山物語』、「ますらを物語」、菟原処女伝説など様々な対象と比較されてきた。特に主題論においては、同作者が同素材を扱った「ますらを物語」の存在

が色濃く反映されている。例えば浅野三平「源太騒動と綾足、秋成」^①は「西山物語」と「ますらを物語」を比較対象に挙げたうえで、「死首の咲顔」の主題は「五蔵、宗という男女の恋愛、及びそれを許さぬ五蔵の父、五曹次の吝嗇非情な性格の追求にあった」と述べる。森山重雄「『西山物語』と『死首のゑがほ』」^②は「ますらを物語」でほとんど描写されない右内が、「死首の咲顔」において五蔵としてその人間像が新しく描写されていることに注目し「死首のゑがほ」の価値は、五蔵像の創造にある」と主張する。

一方で、「死首の咲顔」を独立した作品として捉える論もある。大輪靖宏「春雨物語「死首のゑがほ」論」^③は、孝というモラルに縛られた五蔵の姿から「社会とは何か、道徳とは何かという問題とともに、人間とは何かという最も根本的な問題まで語られている」と述べる。また、揖斐高「『死首のゑがほ』の主題」^④は、同じく春雨物語に収録された「血かたびら」や「雨月物語」との共通性を指摘しながら、主題について「大切な人を犠牲にすることによって、ようやく『善柔』の性から『たくましさ性』へと脱却することができた五蔵の姿を描くこと」と結論づけている。

以上のように、「死首の咲顔」の作品研究において特に「ますらを物語」は無視し難い作品として扱われてきた反面、「死首の咲顔」の解釈は、この先行作に依存してきたとも言えよう。「死首の咲顔」における主題論は、主に「ますらを物語」ではほぼ描かれず存在の薄かった右内が、「死首の咲顔」で五蔵という「孝と恋愛に葛藤する人物」に創造されたことを理由に、五蔵を中心に検討されてきた。先に挙げた「ますらを物語」と距離を置く立場の大輪氏や揖斐氏の論であっても、五蔵を主人公に据えた主題を提示するための根

拠を、同じように右内との比較に求めているという点において「ますらを物語」との関係を断ち切れぬままである。また、以上の先行研究全体を通して「五蔵を主人公とする論」と「五蔵の人間像追究を主題とする論」の繋がりが曖昧であり、二つを混同する傾向にある。

このように五蔵には主に「ますらを物語」との比較から強く視線が注がれる一方で、ヒロインたる宗をメインとした論の中心は、菟原処女伝説との比較を行ったものである。日野龍夫「峻厳な恋と哀切な恋―秋成と宣長―」^⑤は求塚説話に宗の人物像の源流を求め、長島弘明「『死首の咲顔』考」^⑥は菟原処女伝説と「塚」というキーワードの共通性を論じ、「死首」というモチーフの演劇的趣向についても触れている。ただしこれらの指摘は作品の一要素や作品構造の問題を示すに留まっており、作品自体の主題を明確に論じたものとは言い難い。宗は「死首の咲顔」という題号そのものに関わる人物でありながら、主題に絡めた考察が十分になされていないのである。

本稿では「死首の咲顔」を独立した作品と捉えた上で、先行研究では軽視される傾向にあった元助一家にも焦点を当てつつ、人物描写の内容を吟味し、物語の構造と主題に迫ることを目的とする。複数存在する諸本の中では文化五年本を中心として、羽倉本を補助的に用いて考察していきたい。

二、「死首の咲顔」と「ますらを物語」の比較

「死首の咲顔」と「ますらを物語」を切り離して読むという前提

を確立するため、事件の中心的な存在である元助一家と源太一家の登場人物に注目した比較を行う⁷⁾。

最初に、作中のヒロインである宗と弟姫について検討していきたい。まず、「五蔵／右内」の訪問が絶え、恋愛関係が停滞した際の「宗／弟姫」の反応である。

【場面一】

かよひ絶えたりとも、兼ねての心あつきをおもひて、うらみ云ふべくもあらずぞありける。かりそめぶしにやまひして、物くはず、夜ひるなくこもりをり。(中略)母、日毎にやせやせと、色しろくくろみつきたるを見て、(後略) (「死首の咲顔」)

又あなたにも、弟姫今はおもひさだめて、母のおまへににじり出、「(前略) あはれ今までの命ぞとおぼしなして、御暇たまはらばや。たゞうらみつべきは男の心也。親ゆるしなくば、一たびはいづ地にも逃かくれて、出交はる世をまつべきものはいひしは、なぐさめかねし偽か。死は安し、ひたぶるに頼みてあれといひしはきのふの事也。我先死なん。云かひなき人の音づれば待たじ」とて、深く思さだめたるつらつき也。「ますらを物語」)

「死首の咲顔」の宗は五蔵への気持ちが悪り、体調を崩してしまふ。次に示すのは、宗が五蔵の見舞いによって一時的に病状を回復する場面である。なお、「ますらを物語」に該当する記述はない。

【場面二】

「(前略) ただ今より心あらためたまへ」とねもころに示されて、「さらさらさらさらやまひすともおぼさで。おのが心のままに起きふしたる、御とがめかたじけなし。即て見たまへ」とて、小櫛

かき入れてみだれをきよめ、着たる馴衣ぬぎやりて、あたらしきにあらため、林は見かへりもせずおき出でて、母にせうとにゑみたてまつりて、かひがひしく掃きふきす。(中略) 打ちゑみて、「よんべの夢見よかりしは、めで鯛と云ふ魚得べきさがぞ」とて、庖丁とり、煮、又あぶりものにして、母と兄とすすめ、後に五曹の右に在りて立走りするを、(後略) (「死首の咲顔」)

この後、再び訪れの絶えた五蔵を待ち続けた宗は、段々と死に近づいていく。

【場面三】

かのむすめのかたには、おとづれ絶えぬるままに、やまひおもく成りて、(後略) (「死首の咲顔」)

【場面一】、【場面二】、【場面三】を通して、「恋仲である男の訪問が絶える」という共通した状況下での反応の違いから、「宗」と「弟姫」の表象の違いが見出されるであろう。宗は「男を信じ待ちわびた結果、恋の病に冒され生命の危機に陥る女」なのであり、弟姫は「男を裏切りの対象として認識し、自ら死に突き進まんと決意する女」なのである。

続いて、嫁入りが決まった後の展開について見ていきたい。次に示すのは、嫁入り当日の朝の「宗／弟姫」の母への態度である。

【場面四】

むすめただゑみさかえて、「やがて又参らん」とて駕にかきのせられ行く。(「死首の咲顔」)
けはひよく打ゑみ、母のふしたまふかたを伏拝みして、「いざ」といふ。(「ますらを物語」)

母親との別れの後、「宗／弟姫」は「五蔵／右内」のもとへ向かう。「ますらを物語」の弟姫は、嫁入りを団次に拒絶された上に右内も不在であった。弟姫は、その場で兄・源太に暇を乞う。「死首の咲顔」には該当の記述がない。

【場面五】

はた、死なんとおぼして、いづ地しらず出給ふならむ。かた時もおくれてあらじ。御手たまはずば、ふところの物もていさぎよからん。ねがふはこ、にてたゞ今」と云。

（「ますらを物語」）

【場面四】、【場面五】を通して、宗と弟姫の嫁入り当日の言動から、二人にとっての「嫁入り」はそれぞれ意味が異なることが分かる。宗にとって嫁入りは結婚のために必要な「儀礼」であったが、弟姫にとって嫁入りは自死のための「手段」であった。「死は安し、ひたぶるに頼みてあれ」とまで言った右内が、自分をこのような状態にした。この関係の責任を、命を絶つ前に「嫁入り」という形式を取ることで示そうとしたのである。

宗も弟姫も、「最終的には兄の手にかかって命を落とす」という死因自体は一致している。しかしながら、相手の男に対して、「兼ねての心あつきをおもひて、うらみ云ふべくもあらずぞありける」と待ち焦がれ病にかかる宗と、「云かひなき人の音づれば待たじ」と憤慨し自死を選択する弟姫とは、死への向かい方が明らかに異なっている。それに伴い、「嫁入り」という相手の男の家へ向かう行為の意味合いも違ってくる。宗は「五蔵との正式な婚姻関係の成立」を目的としている。つまり、嫁入りそれ自身が達成すべき目標のひとつなのである。一方、弟姫は「右内の家で死に、自分の矜持

を示すこと」を目的としている。右内の不在に関わらず弟姫の決意が変わらなかつたのは、結婚よりも「ねがふはこ、にてたゞ今」という望みこそが優先事項であつたことの裏付けに他ならない。

それではこの宗と弟姫の形象を踏まえ、次に元助一家と源太一家の連携の動機について考えていきたい。まず、「五蔵／右内」と「宗／弟姫」の恋愛関係が成立した後の、「元助一家／源太一家」の状況を確認する。

【場面六】

同じ氏の人なれば、五蔵常にゆきかひして、交り浅からぬに、物とひ聞きて、師とたのみて学びけり。いつしか物いひかはして、たのもし人にかたらししを、母も兄もよき事に見ゆるしてけり。

（「死首の咲顔」）

（「前略」）ましてこちぐに枝さしわかれつれど、根ざしひとつの家なれば、是をよき事とは思はで、いみじく恥あたへつべき者也。佐野の舟はしとく中とり放ちてたえよかし」と、いとこまやか也。「御教へかしこまり侍る。御ゆるしなき事し出たる罪赦させたまへ」と、泣々云つれど、猶かたみに情しく、しのびぐにあひにけり。今はをしへわづらひて、「しひごとせば淵にや沈まむ、木にやさがりなん。云結ぶとも、彼人かたくゆるすまじ。たゞ是がおもひばかりに」とて、兄のますら男めして、「しかぐの事いかゞ思ふや。大馬のからきわたりして、なるとならざるを人して云よせよ」となん。打かしこまりて、「御心の如、必うけ引まじきに、かけ橋せんは世のつねながら、もしいかさまにいはれて恥をみむより、たゞさしむかひていはんには、人ぎ、うたてからまじ」と云。

(「ますらを物語」)

次に、「宗／弟姫」の嫁入り支度に際した、家族の様子である。

【場面七】

夜明けぬれば、母しろ小袖とう出て打ちきせ、髪のみだれ小櫛かきいれて、「我もわかきむかしのうれしき、露わすられずぞある。かしこにまゐりては、ただ、父のおにおにしきをよくみ心とれ。母君は必ずよ、いとほしみたまひてん」とて、よそほひとりつくるひて、駕にのるまで万をしへきこゆ。元輔麻がみしも正しくて、刀わきざし横たへ、「又五日といふ日にはかへりこんを、あまりに言長し」とて、母をせいしかねたり。むすめただゑみさかえて、「やがて又參らん」とて駕にかきのせられ行く。元すけそひて出づれば、母は門火たきてうれしげ也。

(「死首の咲顔」)

は、君、えたへずおき出て、「女はよき家にめとらるゝとも、又其家のをしへをいたゞきて、おのが心なる世はなき者也。たま／＼義と信との為に刃にふし、くびれなどするを、烈女とてかたりつたへしも、おもへ、それ身幸ひなきもの、死にせまりたるにて、をみなしからぬものにて、是にかぞへあげられほまれ有むは、貞操にかへて命をおとし、孝忠にたがふ罪かるからず。今かく帰るべからぬ迷ひ路に入たるはいと苦しからめ。とくゆけ」とて、涙見せず奥にぬざり入給ふ。せうと、「まよひ路なれど二筋也。我さす枝折につきてこよ」とて、さきに立て出。

(「ますらを物語」)

【場面六】で示しているように、宗と五蔵の恋愛は母と兄・元助に許容されている。一方で、弟姫と右内の恋愛は、団次の態度を引

き合いにして母親から反対されている。続いて、【場面七】では宗と五蔵の結婚を祝福する元助一家と、弟姫の死、そしてそれが「貞操にかへて命をおとし、孝忠にたがふ罪」であることを強く意識した源太一家の姿が読み取れる。

以上、作品における描写の差異から、「宗と五蔵／弟姫と右内」の男女の関係性が、「女側の家はどう受け取られ」、それを踏まえ「何を目的として行動していくか」という違いが分かる。つまり、五蔵と宗の二人が結ばれること、婚姻関係を目指すのが元助一家の姿勢であり、右内への不満を共有し、弟姫の選択に心を痛めながらも、弟姫の希望を叶えることを目指すのが源太一家の姿勢である。

このように、両作品は「源太騒動」という同素材を用いながらも「元助一家／源太一家」が斬首事件を起こすに至る経緯と目的、それと共鳴して描かれる家族像も明らかに異なっており、作者が両家を用意して描き分けているのは明確である。つまり、騒動の主体として物語の核を担う家族の姿には二つの作品内で大きな差異があり、別の趣旨を以て書き分けられた作品と考えられる。以上のことから、「死首の咲顔」と「ますらを物語」とは、別個の作品として切り離して読むことが適切であると結論したい。

三、元助一家と五曾次一家の形象

次に、「死首の咲顔」の構造及び主題について、登場人物の描かれ方に着目しながら検討する^⑧。

まず、元助一家の人物像について見ていきたい。前述のとおり、宗はただ一途に五蔵を思い続ける娘として描かれている。盲目なま

でに一貫した五蔵への気持ちは、親の手伝いを怠らず、文字の読み書きにも励み、五蔵に教えを乞い意欲的に学ぶといった、この健気さや熱心さが実直に表れたものであろう。そして宗は「たのもし人」となった五蔵の「兼ねての心あつき」を頼りに、五蔵への思いを募らせていく。

元助は、同族の老人から「志たかきますらを也」と評されている。「ますらを」は「男らしく立派な男子」の意である。この言葉は古代の和歌では「ますらをや片恋せむと嘆けども醜のますらをなほ恋にけり」（『万葉集』巻第二）や、「梓弓引きて緩へぬますらをや恋といふものを忍びかねてむ」（『万葉集』巻第十二）のように用いられており、「恋にとらわれることなどない雄々しさがその典型的な姿と考えられていた」（『角川古語辞典』）ようである。宗が病み臥せった当初の「若きままに心にかげず」という態度、そして五蔵の来訪により体調を回復した宗に対する「うそぶきてのみ」といった態度は、元助が持つ「ますらを性」に起因するものと理解できよう。恋にとらわれない「ますらを」である元助は、宗の恋煩いの重大さに鈍感であり、宗が病から立ち直ったという喜ばしい状況にあっても、妹や五蔵が恋愛に翻弄される様子を正面から肯定できなかつたのではないだろうか。元助は、五蔵の「せうとの御心たのもしくはからひてたべ」という正式な嫁入りの話を直接持ち掛けられてはじめて、宗と五蔵の関係を積極的に進めようとするのである。

元助母は、一家のために「おのがためならず」働く母親として設定されている。宗の病因を見抜くほか、宗の喜びの感情に呼応して「いといとよろこぶ」、「よろこびの立ちまひして」、「門火たきてうれしげ也」と描写される。宗の門出を待ちわびていたことから、

宗の思いの成就を願う様子がうかがえる。元助母は、宗の嫁入り当日の朝に「我もわかきむかしのうれしき、露わすられずぞある」と、自分と娘の宗を重ね合わせるかのような発言をする。元助母が家族である娘の心情に対し当事者の如く寄り添う言動は、「おのがためならず」という性質に由来するものであろう。

以上を踏まえ、元助一家の結合について考えていきたい。元助らが結束を強めたのは、宗の死期が迫り、正式な「結婚」という共通の目的が明確なものとなつてからである。夫婦の約束をしつつも二者間の「恋愛」に留まっていた二人の関係は、宗の危篤を知りやつて来た五蔵が結婚への具体的な意思表示をしたことで変化する。五蔵による翌朝の興入れの提案を経て、現実的な「婚姻」の関係へと発展したのである。

若い男女二人の恋愛関係は、女側に死期が迫つたことをきっかけに正式な婚姻関係に改められ、両者の家族を巻き込んでいく。「ちち母のまへにて、入りさきよからんぞ、せめてねがふなり。せうとの御心たのもしくはからひてたべ」という五蔵の発言は、そんな婚姻という制度の特徴をよく表している。さらに、それを裏付けるように行われるのが嫁入り前日の婚儀や、当日の正装、初里帰りへの言及といった儀式的なものである。このような段階を経て、元助個人から見た宗と五蔵とのつながりは、「ますらを性から遠い不安定な恋愛関係」から、「結婚儀礼を経た正式な間柄」へと変化していき、二人の婚姻を進めていく積極性に繋がっていく。そして五蔵を思い続ける宗、その宗の気持ちに寄り添う母親と、性格や価値観が完全には一致しない面々ではあるが、考え方や立場が違う中で、宗の危篤をきっかけに浮上した「五蔵と宗の結婚」という目標を共有

することで結束していくのである。その過程には宗の容態の悪化があるが、それに対する「「けふあすよ」と母兄はなげきて」という反応は、宗の死が一家に眼前の危機として共有され、直接的に受容されていたことを示しているよう。

次に、五曾次一家の人物像を見ていきたい。五蔵は生来の「宮こ人」で、武芸にも通じる文武両道の青年である。優しい風貌に似合わぬ雄々しさをもち、人のために役立つことを常に考え、礼儀正しく、貧しい者には力を貸すことに尽力していた。五蔵は宗との恋愛について「この事、父ははゆるしたまはずとも、おもふ心あれば、必ずよ我よくせん」などと愛を誓いながら、その一方で両親の前では「ただ今、心をあらためてん。罪いかにも赦したうべよ」と謝罪している。様々な性質を併せ持つ五蔵は、物事の価値基準を複数内包することによって、宗への愛と両親の意向の間に迷い、追いつまされていく。

五曾次は「おにおにしき」「鬼の口ありたけにはだけて」など、繰り返し鬼と形容され、金儲けに目が無い非道な人物として描かれる。貧乏な元助一家を軽蔑しており、一人息子である五蔵が宗と恋愛関係を築いていることに不満を抱いている。貧乏な元助一家の娘として宗を「あさましき者の娘」と罵り、五蔵が家業に取り組み始めた際には「洪ぞめの物似あひしは、福の神の御仕させなり」と喜ぶ。

五蔵母の人となりについて詳細に述べた記述はない。作中では、五蔵と五曾次の仲を取りなす役割を果たしている。五蔵が宗の元へ行くのを阻止して「まづしき人の家には、ふつにゆきそ」と指示したかと思えば、五蔵が家に仕える宣言をした後は「神のむすびたま

ふ縁ならば、つひのあふせあるべし」と言い慰めており、五蔵母の真意そのものは判明させづらい。しかし、五曾次の譴責をなだめ五蔵を庇っていることを考えると、夫と息子の調停を行うことに気を配る母親として捉えてよいであろう。

以上を踏まえると、五曾次一家の結束は、五蔵が主に父親の要求を汲み、自己の言動を制限することによって維持されていると分かる。五蔵は五曾次の言いつけと母親の仲裁によって、宗への思いだけでなく書物を好み学ぶという自らの趣向さえも抑制し、本来の自分とは全く異なる父親の価値観に合わせ、従うようになる。

しかしながら、五蔵は「我が家は宝つみて、くづるまじき父の守り也」といった「富」を重要視する父親の信条自体に賛同しているわけではない。ただ「父ははにかへずして出でゆかんが、わりなき事」という考えから、親の指示に従うのである。宗の危篤が「兼ねて思ひし事」であったように、五蔵は宗への思いを継続したまま、断ち切れないでいた。五蔵の宗のもとに通う行動を制限させた「孝」の力も、五蔵の宗に対する心の内まで縛ることはできていなかったと言える。

そんな五蔵の思いをよそに、五曾次一家の動向は、「家業を持続させ、富や財宝など金銭を手に入れること」を最重要とする五曾次に委ねられている。付き従う五蔵や五蔵母は、五曾次の価値観を「五曾次に合わせて」、受容しているに過ぎない。また、五蔵母は宗に関して五蔵に「ご縁があれば」と言い慰めるが、それ以上の動きはしない。親子関係の維持に努めるものの、その姿勢は消極的である。結果として五曾次一家は、家族間の齟齬を根本的に解消せぬまま、五蔵に負荷を強いる状態で家族としての均衡を保っていたので

ある。

ここまでの考察を念頭に置きつつ二つの家を比較した場合、「宗の生命の危機を共有し、共に結婚を推し進める元助一家」と、「財産にこだわる五曾次の価値観に合わせ、家業を維持する五曾次一家」の姿をみる事ができる。元助一家は嫁入りの前夜、「おや子三人、こよひの月のひかりに、何事をもかたりあか」した。一方で五曾次らは「れいの門、立てこめられんよ」と門限に合わせ帰宅した五蔵が、実は宗との結婚を取り決めていたとは知る由もなかったのである。

以上のように、元助一家は五曾次一家と並列に比較しうる存在であり、決して副次的な存在として描かれてはいないと分かる。

また羽倉本では、五曾次親子の関係性は文化五年本と共通しながらも、二者間の応酬は文化五年本の如く丁寧には描かれない。この事実も、「死首の咲顔」の主眼が五蔵らに限定されたものではないことの裏付けとして述べておきたい。

四、「ゑみたる」宗が示唆するもの

続いて、宗の形象について探っていききたい。まず、宗の病気の要因について検討するために、改めて物語の流れを整理する。当初、五曾次の反対から宗と五蔵の間には距離が生まれ、恋愛関係は停滞していた。その状況下で事態が動いたのは、宗が病に陥ったことが原因であった。宗の母と兄は宗の病状を見かね、恋愛相手である五蔵の元に使いを寄こした。それを受け、五蔵は宗の元へとやって来た。つまり、宗の病気が五蔵を宗の元に運んだと言える。さらに、

その病気は五蔵への思いを募らせた恋煩いであることから考えれば、宗の五蔵に対する思いこそが、元助一家をはじめとして五蔵をも動かしたと言えるだろう。

羽倉本においても宗の病気の由来は恋による精神的な負担からくるものであったことが仄めかされ、「くすりはあたふべきにあらず」(文化五年本)、「葉のますとも、たのまれね」(羽倉本)と、「葉を当てにできない」と言及される部分も共通している。五蔵への恋が病に発展する程に思い煩う宗の一途な姿は、描かれるべくして描かれたものであろう。

宗の態度の一貫性は、本文の描写からも窺える。五蔵が見舞いに訪れ励まされた後は「母にせうとにゑみたてまつり」、五蔵の差し出した鯛を見て「打ちゑみ」、婚儀の盆を受けた際は「いとうれしげ」な様子であった。嫁入りの朝は駕に載せられ「ただゑみさかえて」五蔵の元へ向かい、命を落とした結末部で宗の首は「ゑみたるまま」と表現される。

ここで着目したいのが、「ゑむ」という一つのキーワードである。作中で宗以外の登場人物が喜びの感情を示す場合には「よろこぶ」、「うれしげ」といった語句で示され、「ゑむ」が用いられるのは、宗ただ一人のみである。さらに、題号「死首の咲顔」の「死首」は明らかに宗を指すものであるから、それを含めればこの物語には「ゑむ」に関連する語が、五回繰り返し用いられていることになる。場面について見てみると、「ゑむ」が用いられる状況は、五蔵に会っている時や五蔵の家に向かう時など、五蔵に関わる事項に集中している。そして、逆に五蔵に会えずにいる時は体調を崩しており、宗の感情は五蔵との関係と連動し、明瞭に描かれていると分かる。

羽倉本においては、「ゑむ」という動詞は「五藏八首とり上て見れば、ゑミたる顔にうれしさもまざる」という文中に登場する。文化五年本のように多用されてはいないものの、宗に単独的に使われた言葉であることは共通している。羽倉本には宗の戒名が登場し、「貞松宗信比丘尼」という。「貞松」とは「松樹を貞木といふことは、まさしく人のために、彼木の真心あるにはあらず。霜雪のはげしきにも色をあらためず、いつもみどりなれば、これを真心にくらぶる也」（『古今著聞集』）というように、人の貞操があることを比喩して用いる言葉である。五藏からの便りが途絶え病に陥る窮地に立たされても、不平不満を言うことなく五藏を信じて待ち続けた宗の様子をよく言い表している。

つまり、「ゑむ」は宗の一貫性を象徴する言葉であり、かつ題号にも関わる言葉として、重要なキーワードであると考えられる。読み手はこの物語における宗の在り様を、「ゑむ」という態度から窺い知ることが出来る。この一つの言葉を意図的に宗に限定して付与することで、五藏への思慕を終始貫くという宗の個性が浮き彫りになる。宗の姿は、文化五年本においてはさらに「ゑむ」の多用を通して、羽倉本においては戒名に含まれる言葉の意味から、作法的に描かれたものであると言える。

このような宗の形象を捉えたとき、その他の登場人物の姿はどのように読み取ることが出来るであろうか。前章では元助一家と五曾次一家の結合の手掛かりを、前者は宗の生命に、後者は五曾次の価値観にあることを見出した。それらを前提とすれば、両家はそれぞれ宗と五曾次を中心人物として団結しているといつてよい。よって、この二人を比較してみたい。次の場面は、宗に会った五藏を叱

責した後、妻にたしなめられた際と、羽倉本において元助が宗の首を刎ねた際の五曾次の様子である。

【場面八】

母とりさへて、「先づ、我がところにこよ。よんべよりのたまひし事、つばらかに云ひきかせて後、ともかうもなるべし」。曾二いかりにらみたるも、さすがに子とおもひて、おのが所へ入る。母なくなく意見まめやか也。

【場面九】

やと一聲に首ハ膝の上に落ぬ。鬼曾二逃まとひ、我ハゆるせとて、見くるしきを、家の者等ハにくむ。(羽倉本)

これまで見てきたように、五曾次は一番に富を基準として動く人物である。しかし、【場面八】では一人息子に対して勘当を言い渡すことを迷い、【場面九】では自分の身を守ることに必死になっている。自分の反対をよそに貧乏な家の娘の元に行つた息子を一時的に見逃し、或いは貧しさから侮蔑していた元助を相手に命乞いしている。五曾次は自らの価値観を徹底的に貫くに至っていない。

流動的に己の欲望や葛藤に揺れ言動を变じる五曾次らを通して、自らの思いを直情的に貫き通した宗の姿は強かに浮かび上がってくるのである。宗と五曾次を家の結合の要因を握る人物として捉え比較したとき、その対照性はこのような気骨の有無に見ることが出来る。

宗の「ゑむ」という一見柔和な仕草のその裏には、同時に自らの生命の危機に向かわせるほどに首尾一貫した、「たけだけし」く強固な五藏への思いが存在しているのである。掛け離れたように思われるこの二つの要素は、宗という一人の貞淑たる個人を観察する

と、自然と一直線上に繋がる。その現象がそのまま体现されたのが「呑みたる死首」というモチーフであると考えれば、題号の由来をここに見ることが出来る。

五、「家族」と「個人」の在り方

ただし、先に示した宗と五曾次の在り方の相違を、元助一家と五曾次一家との家の対立として捉えるのは早計であろう。五曾次一家が不調和の状態にある一方で、元助一家も完全に一体化した家庭として描かれているわけではないことは前述したとおりである。宗の死は、意図され強制されたものではなく、一途な思い故に病魔に見舞われるという「成り行き」から発生したものである。だからこそ、宗の死は「思想」としてではなく現実差し迫った「出来事」として家族に受け止められる。そして結婚を進める動機となり、同時に宗個人の意思の強度の証明として機能する。元助一家は、あくまで己の価値観や立場という個を持った上で協力し合っている。

中心人物たる宗と五曾次との比較から元助一家と五曾次一家との間には対立関係を見出せる一方で、無視できない共通点がある。それは「一人一人が、家族の一員である以前にそれぞれの思惑を宿す明確な個人として描かれている」ことである。これまでに指摘した両家の相違は、この共通性を前提として立ちのぼって来るものである。それは、お互いの個を維持したままに連携する元助一家と、五蔵の個を犠牲に取り持たれた五曾次一家の姿である。個々の人物像と家族結合の由来を辿ることで、この構造が見出されるのである。

それでは、この家族の在り方は物語展開にどのような影響を与え

ているであろうか。次は、五蔵が父親・五曾次の目前で宗が自分の妻であることを宣言する場面である。

【場面十】

五蔵、「いかにもしたまへ。この女、我がつま也。追ひ出さるれば、ここより手とりて出でんと、兼ねて思ふにたがはざるこのあした也。いざ」といひて、手とりて出づべくす。

この五蔵の主張は、この切迫した場をつくりあげ、自身の一徹した思いから死の間際に身を置くまでに至った宗によつて掻き出された、五蔵個人としての欲求である。宗は意図せず自らの生命を切り札として用い、五蔵を五曾次の元から引き剝がすことに成功している。五蔵は心中では宗を諦め切れずにいながら、表面的には親に従っていた。言い換えるならば、これは親子間の意思疎通が不可能になつていたことの現れであろう。元助一行が嫁入りの為にやつて来たことを知つた五曾次は、次のように責め立てていた。

【場面十一】

鬼の口ありたけにはだけて、「何事を云ふぞ。妹に我が子が目かけしと云ふ事きさしかば、つよくいさめて、今は心にも出さず。おのれ等きつねのつきてくるふか」とて、膝たて直し目いからして、(後略)

五曾次は、宗の嫁入りが五蔵の許諾の上に行われたものであると考えていかなかった。つまり、五曾次には「追ひ出さるれば、ここより手とりて出でんと、兼ねて思」つていたという、五蔵の本心を捉えることができていなかったたのである。最終的に、宗と五蔵の結婚を巡るこの一連の事件の結果として、五曾次一家は家財を取りあげられ、離散してしまふ。

五曾次は五蔵の意思を否定し、自分の価値観を押し付け順応させたことに満足して、五蔵の内にある個人の欲求を見落としていた。五曾次のあずかり知らぬ所で進められていた五蔵と元助一家の計画は、結果として斬首事件という事態に発展してしまう。そして、息子の五蔵に家業を強いてまで保持してきた財産を、五曾次は手放すこととなってしまう。個人を蔑ろにしてまで家族体制の維持を優先したことの弊害を、ここに見ることができよう。

五蔵への恋情を不変不動のものとして有する宗は、その思いの強大さを示し、五曾次らの自己欲求を一貫しきれぬ弱さを照らし出す。それと共に、五蔵の心情を五曾次の眼前で引き出すことによって、個人を抑圧した上に成立する関係の脆弱性を暴いている。この宗の強烈な個性は、個人の情動を持った自分自身で在ろうとする、人間の素朴な欲求の気迫を物語っていく。時勢に遅れた貧困の家の者として、五曾次に「あさましき者のむすめ」（文化五年本）、「あさましきかたる者の娘」（羽倉本）と軽視された宗がこのような力を有していたことを、秋成は逆説的に「死首の咲顔」に込めたのである。

【注】

- (1) 浅野三平「源太騒動と綾足、秋成」京都女子大学『女子大國文』第二四号・第二五号、一九六二年二月・六月
- (2) 森山重雄「『西山物語』と『死首のゑがほ』」（『幻妖の文学』上田秋成）一九八二年、三二書房。初出『俄草紙』第四卷、一九七九年九月
- (3) 大輪靖宏「春雨物語「死首のゑがほ」論」上智大学国文学科

『上智大学国文学科紀要』第三号、一九八六年一月

- (4) 揖斐高「『死首のゑがほ』の主題」東京大学国語国文学会編『国語と国文学』六七号、一九九〇年七月

- (5) 日野龍夫「峻厳な恋と哀切な恋」秋成と宣長」京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室『京都大学國文學論叢』第四卷、二〇〇〇年六月

- (6) 長島弘明「『死首の咲顔』考」東京大学国語国文学会編『国語と国文学』八五号、二〇〇八年五月

- (7) 本文の引用について、「死首の咲顔」の本文は桜山文庫本を軸として、西荘文庫本、漆山本を補助的に用いた文化五年本を底本とする。「ますらを物語」の本文は天理図書館所蔵、秋成自筆卷子本を底本とする。以上、両本とも『新編日本古典文学全集78 英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』（一九九五年、小学館）による。

- (8) 以下、特に注記の無い内容は引き続き文化五年本からの引用である。また、羽倉本は『天理図書館所蔵 春雨物語』羽倉本・天理冊子本・西荘本』（二〇二一年、八木書店）から本文を引用し、内容参照の際は羽倉本であることを明記する。

【付記】

本稿は、山口大学人文学部国語国文学会第四十九回研究発表会（二〇二四年五月十二日）における問題での口頭発表会に基づく。席上教示を賜った方々に御礼申し上げます。

（しんぼ・さえ）